

道徳的ディレンマと正しい行為

信原幸弘

私たちはときに道徳的ディレンマに陥ることがある。すなわち、二つの行為のうち、どちらかを行うしかないが、どちらを行っても悪い結果が生じてしまうような状況である。有名なトローリー問題もそのようなディレンマの一つである。トローリー問題にはいくつものタイプがあるが、そのうちの代表的な一つであるスイッチ問題では、暴走するトロッキの軌道を変えるためにスイッチを切り替えることができるが、そうすると、別の軌道上にいる1人の作業員がひき殺されることになり、スイッチを切り替えなければ、元の軌道上の5人の作業員がひき殺されることになる。

このような状況に直面したとき、スイッチを切り替えるべきだろうか、それとも切り替えないでおくべきだろうか。いったいどちらの行為が正しいのだろうか。この問いには、しかし、ある重要な区別が見逃されている、とハーストハウスは主張する。すなわち、行為決定の問題と行為評価の問題が区別されなければならない。スイッチを切り替えるのと切り替えないのとどちらをするのが正しいかという問題は行為決定の問題であり、それはこの二つの行為がそれぞれ正しいかどうかという行為評価の問題とは別である。スイッチを切り替えないで5人を死なせるよりも切り替えて1人を死なせるほうがおそらくまだましであろうから、スイッチを切り替えることにするのが正しい決定であろう。しかし、そうすることは、結局、1人の人を死なせることになるから、やはり正しい行為だとは評価できないだろう。もちろん、スイッチを切り替えないことも、正しい行為ではない。つまり、スイッチ問題の状況では、正しい行為は存在しないのだ、とハーストハウスは主張する。

このようなハーストハウスの主張はなかなか説得力がある。しかし、本当に道徳的ディレンマの状況では、正しい行為は存在しないのであろうか。スイッチ問題では、スイッチを切り替えるのが、たんに正しい決定だというだけではなく、おそらく正しい行為でもあるように感じられるのではないだろうか。その行為は1人の人を犠牲にするが、その代わり5人を救う。そして5人の救済という善の大きさは1人の死という悪の大きさを上回っている。したがって、悪は善によって帳消しにされ、さらに悪の分を差し引いた善が残る。そうであれば、スイッチを切り替えるのは、総合的には良い結果をもたらすのだから、正しい行為だと言えるのではないか。そして逆に、スイッチを切り替えないのは、帰結する悪が帰結する善を帳消しにして悪が残るから、正しくない行為だということになる。

しかし、善と悪のあいだのこのような帳消しは本当に可能なのだろうか。たしかにそれほど深刻でない善と悪のあいだや、純粋に金銭的な損得にすぎないような善と悪のあいだでは、そのような帳消しが可能なこともあるように思われるが、けっして帳消しができない場合もあるように思われる。人の命がかかっているスイッチ問題は、まさに帳消しができないケースではなかろうか。スイッチを切り替えることで、5人が救済されても、それ

で1人が犠牲になることがどうでもよいことになるわけではない。それは依然として深刻な悪であり、5人の救済という善によって帳消しにはされない。

では、帳消しにできないときには、なぜそれができないのであろうか。帳消し不可能性には情動が深く関与している。5人を救ったとしても、1人を犠牲にしたことにたいしては、どうしても罪悪感が生じる。そしてこの罪悪感はこの状況の価値的性質を正しく捉えた適切な情動であるように思われる。そうだとすれば、1人を犠牲にすることの悪は5人を救うことの善によって帳消しにされないし、されるべきものでもない。

本発表では、道徳的ディレンマのなかには、ハーストハウスが主張するように、正しい行為が存在しない場合があり、それは帰結する善と悪の帳消しが情動によって不可能になるからだということを論じる。